



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



2

Handwritten text in cursive style, partially obscured by the binding edge.

Handwritten text in cursive style, possibly a signature or name.

高崎正介の書
かきとせやえ... (vertical text)

Handwritten text in cursive style, including a signature and a date.

Handwritten text in cursive style, possibly a date or a specific note.

Handwritten text in cursive style, possibly a signature or name.

Handwritten text in cursive style, possibly a signature or name.



社頭

多岐をこころりうし神子
月さくらし朱の玉かき

空の言下
あふれははら
十八日
古ありかたあはれ

くまねとみかみん
こころいしや
こころいしや

みかみん
あ

走らんらん
かろ小おふふは

七年

七中と老とをたうふ
あくまの子
あくまの子

あくまの子
あくまの子
あくまの子

かろ小おふふは

二峰 高林信好

唐三三女様ニヨリテ
あつたドハ
あつたドハ

高林老く
運曆の如し

女老人のト古方
はな
はな

あふのねるん
はな
はな

筑紫國福岡府高原藩二部

名久しくそ所は
長かき時

國の為こころを
なすれり

社頭書

多岐をこころりし神子
風をくくし生みし玉かき

そとに降る家

空の言に
おまけに
十一
おまけに
おまけに

くまをみたりん

おまけに
おまけに
おまけに

また降る家

走らんらん

おまけに
おまけに
おまけに

七年

七中と老と老たつよ

あつた子

おまけに

おまけに

高林老人の還暦お慶に

六十過ぎるにひとよあはれ

あよのねるに手あはれ

おまけに

筑紫國福岡の高原藤二郎

名をくくす所は長かき

國の為こころをすめり

筑前國福岡の高原藤二郎
名之しく其所に於長官の時
國の為に心を盡す所あり
念りては免下を遣ふと勸め
その心誠多しなりと云ふ
心も母を思ふ人なり
侍を申し先づ公を

又此書は藤原氏の御書なり

寒夜月

いづれかたの月影を
みればかたの月影を

竹屋江云

いづれかたの月影を

いづれかたの月影を

新年書

是も又おありと云ふ

年をとりては

道上御書

此社の油とわたりて

女侍御書

年をうらむに終の事

道上徴子

けむの油とれ、ちりく
えんをんや、ちりく
女成、秋、涼、雨、下、へ、は、秋、市、決、り、如、名、中、之、如
女、果、里、子

季書

春祝

花をみれば春の光
あけぬは春の光
あけぬは春の光
あけぬは春の光
あけぬは春の光
あけぬは春の光
あけぬは春の光
あけぬは春の光
あけぬは春の光
あけぬは春の光

初園鳥

季書

初園鳥

あけぬは春の光

初回寫

此録片と云ふは初ら書

と云ふは又と此書に列

順初ら梅の枝に子ゆ

かきと云ふは梅の枝

梅の枝を云ふは梅の枝

と云ふは梅の枝を云

梅の枝を云ふは梅の枝

乃中重定、三洗

鯛牛

乃中重定、三洗

乃中重定、三洗

乃中重定、三洗

乃中重定、三洗

乃中重定、三洗

乃中重定、三洗

武内宿禰

乃中重定、三洗

西本本草

武内宿祢

季子

生るるをくしくく五つきり

出代の子もはく人の心

早春月

此夕之夜に初如る月をよみ
とほりてしを元子にせしむ

氷始解

大方に人のうらなも春の心

少くも人の心は初春の心

此夕之夜に初如る月をよみ

又建貴梅花

梅の心は初春の心

わらわをよみし初春の心

大和本草綱目

唐ノ曹朏カ百石譜ニ花中ノ神名ト稱シ

又華夏ノ人花中ノ名友ト云詠用材ハ

海棠ニ香ト云フ根ハ

赤クテ花ノ色ハ白クシテ花ノ心ハ

赤クシテ花ノ心ハ白クシテ花ノ心ハ

カ下重

取つて

花ノ心ハ白クシテ花ノ心ハ

西宮をてしむる

武内宿禰

生かすをくしくしくくくく

出代の子をいふ人の心

季子

早春月

此夕の夜は初ねの月をよみく
とほおひしをいふこころ

氷始解

大方お人のうらなも春の心

少くもなれぬの海をいふ

はなはたは中下州の心

又建賣梅花

梅の心はさきもいふ初春の

わかさをいふしあめこころ

大和本草綱目云 蘇州村 海堂 香ナキシ根ハ

月下海棠

此の心はねむるをいふ

つきはさきもいふ

はなはたは中下州の心

春郊偶歩

春や花の心はさきもいふ

春や花の心はさきもいふ

カ下市をてしむる

春の心

春の心はさきもいふ

あはれなるおぼろけのあはれなるおぼろけ

かた重なる手紙

あつた

信をよみし若くはしきぬら思ひ

そまゝにたたくゝあはれなる

あつた

あまのこころをたたくゝあはれなる

あまのこころをたたくゝあはれなる

新年喜

あまのこころをたたくゝあはれなる

あまのこころをたたくゝあはれなる

あまのこころをたたくゝあはれなる

あまのこころをたたくゝあはれなる

山残雪

あまのこころをたたくゝあはれなる

あまのこころをたたくゝあはれなる

あまのこころをたたくゝあはれなる

あまのこころをたたくゝあはれなる

あまのこころをたたくゝあはれなる

1870年

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

山崎氏に於て

1877年11月

山崎町 山崎町 山崎町

山崎町 山崎町 山崎町

山崎町 山崎町 山崎町

山崎町

山崎町

山崎町 山崎町

山崎町 山崎町 山崎町

山崎町 山崎町

山崎町 山崎町 山崎町

山崎町 山崎町 山崎町

山崎町

山崎町

山崎町 山崎町 山崎町

山崎町 山崎町 山崎町

山崎町

山崎町

いしつうの字の原をたすか

いしつう

十の字の原
里

朝の原をたすか
これきしむたをたすか

朝の原をたすか

十の字の原
名所

名所
名所
いしつうの字の原をたすか
いしつうの字の原をたすか

名所

いしつうの字の原をたすか
いしつうの字の原をたすか

十の字の原
都春

いしつうの字の原をたすか
いしつうの字の原をたすか

十の字の原
朝

いしつうの字の原をたすか
いしつうの字の原をたすか

いしつう

いしんりうの原の雪の如くすめり

いしんりう

十五、三十一、方々

里歌

朝の光をまよいてふと見ゆれば
さうれきしむる影の如くすめり

あさひのひかりをまよいてふと見ゆれば
さうれきしむる影の如くすめり

あさひのひかり

十六、方々、本歌集

名所歌

朝の光をまたたきよき影の如くすめり
さうれきしむる影の如くすめり

あさひのひかりをまたたきよき影の如くすめり
さうれきしむる影の如くすめり

十七、三十一、方々

濱歌

浪の音をきくれば
さうれきしむる影の如くすめり

なみのねをきくれば

十八、三十一、方々

都春歌

都の春をきくれば
さうれきしむる影の如くすめり

みやこのはるをきくれば

十九、三十一、方々

朝雑

朝の光をきくれば
さうれきしむる影の如くすめり

あさひのひかり

七月廿一日
白雨

風をよむにきりさき白雨の
すそをよむにきりさき白雨の

しんせき

五月廿一日
名取花

花をよむにきりさき白雨の
あはれをよむにきりさき白雨の

しんせき

鈴木重家、示法

梅咲開

あはれをよむにきりさき白雨の
あはれをよむにきりさき白雨の

古重家之如來墨蹟を少く重但二句

手紙下り夏漸思を三歳ガレ之於年久

少可談試

松為友

あはれをよむにきりさき白雨の
あはれをよむにきりさき白雨の

重家云 初句を此の如く 終句を此の如く

云様ニテハ初句が終句ニテ凡ノ意ハ有ルニト

云終句ニテ

鈴木重家、示法

本年三月十八日二筆 高林詠好作 西園

鈴木重家、示法

本年三月十八日二筆高林詠好催西國
中卯梅旅之書畫並延

右二筆今年六月十七日禮意ヲト
所行、夏ニ

祝状云々

六十日... 祝状云々

子名... 祝状云々

~~~~~

長... 祝状云々

ち... 祝状云々

~~~~~

或人ヨリ

筑前國福岡縣國原藩二部之敷

其取ノ戸長ヲ勤ム 非役ノ由 能ク

通届其功行ヲ祝喜見ノ云々

宛字此子福國ノ取之此高島

藩二部之云々

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

平素篤實ニテ一家  
之餘暇ニ民間耕耘  
誘掖教誨自ラ卒  
セシム等前後十有九年  
盡力候改奇特之



好作西國

祝意ヲト

人みよ

ハ

子よ

ハ

方運應の  
小三郎

ハトヨニラ

國語用ル

ハ  
ハ  
ハ

ハ  
ハ  
ハ

ハ

ハ

ハ  
ハ  
ハ

高原謙二郎

平素篤實ニシテ一家之雍睦能ク信義ヲ重シ公務  
之餘暇ニ民間耕耘之事ニ注意心ニ能ク人民ヲシテ  
誘掖教誨自ラ率先トナリ他ノ勉強心ヲ啟發  
セシム等前後十有九年之間毫モ倦怠ノ意ナリ  
盡力候段奇特之事ニ候ナリ



...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

山崎 三郎 宗書 懐詞

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...



終つては端あり

杖 Shōshō

かしこむやふへと乞ひまは物を

老をたすくはれあふ

老れ故こゝろしむる人

いふは杖したるは

予所記の如く... 杖は老のしるしなり

季書

御茶會

# 新年祝言

我君可子世をおきて老路玉の

老しり始り何哉いそん

心を福なるを同くして

七十ちた年終りし人

松平忠敏云在比十人... 君多代ノ時ニ老れ代上ノ事云  
ふしとく自言人、世ノ老く事  
小女公奥ノ方より他乃兼多ク





三條西季知歌稿

|      |
|------|
| 特別   |
| へ 2  |
| 4867 |
| 31   |